

松任谷正隆の

イニのひとりごと

12

VOL.12 ああ、ブルーグラス

同級生のKから誘われてバンドを始めることにした。

これを聴いておいてくれ、とカセットテープを渡され、うちで聴いた。

ところが、どの曲も同じに聞こえる。

参ったなあ、と思いながら、それでもバンドには興味があったので聴いた。

どのボーカルの発声も変だった。なんだろう。誰もが鼻にかかったような、独特な歌い方。

嫌だなあ、こんなものを真似するのか。

これがブルーグラスマジックとの初めての出会いだった。

音楽そのものは至ってシンプル。シンプル過ぎるから全部同じに聞こえるのだ。

それでも、僕はマンドリンを買い、そして練習は確か東銀座にある

Kのマンションの1室でやった。

新橋演舞場の裏あたりのペンシルビル。

どうやらそこは彼の両親の持ち物らしく、彼の部屋は5階にあり、

灰色で生活感のない殺風景な部屋だった。

ここで両親と暮らしているのか、それとも彼だけの部屋だったのかは覚えていない。

覚えているのは、窓が狭いなあ、ということだけ。

Kはバンジョーが上手く、指がよく動いた。

ただしリズムキープはいまいちで、スピードアップしていくKを、

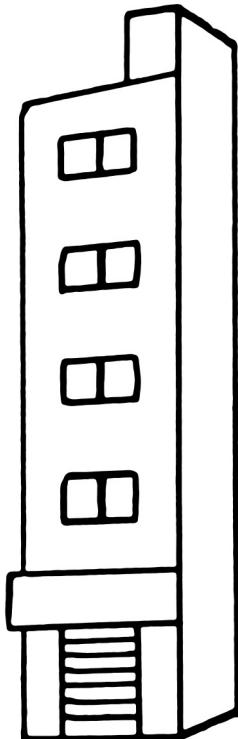
僕とギターのやつが押さえる、といった具合。

あるとき、下級生のTというやつがバンドに入れてくれ、と言ってきたらしい。

Kは僕に「どうする？」と聞き、僕も適当に「いいんじゃない」と言い、

Tがサイドギターで加わった。

ところがこいつときたら完璧なリズム音痴。



もう、みんなと合わせるなんてレベルじゃない。

早くクビにしようぜ、と言っている間に、とあるアマチュアサークルのオーディションの話が舞い込んだ。

参ったな、なんて言いながら、Kと僕はどうやってTにやめてもらうかを話し合った。

結局、Kが話す、ということになって、Tを彼の部屋に呼んだはずだ。

しかし何があったのか、Kは話すのをためらったらしい。結局そのままオーディションの日になった。

僕はTに「いいか、おまえは弾いている振りだけだぞ。絶対に音を出すなよ」

と釘を刺し、Tは「わかりました」と答えた。

オーディション会場は目黒公会堂。

行くとオーディション前に、レギュラーのメンバーたちが

次の公演のための練習をしていた。

メンバーの中には森山良子さんもいた。

そしていよいよオーディション。たった1曲で全てが決まる。

つまりレギュラーになれるか、落ちるか。

曲が始まると、Kは緊張のあまり、いきなりいつもより速いテンポでスタート。

そしてあろうことか、Tがそれに続いた。あっ、バカヤロウ・・・。

でも、やつはこちらを見ずデタラメを弾き続ける。

途中で全員がテンポを見失い、訳の分からぬことになった。

当然のことながらその場で落ちた。僕は人間不信になった。



果然としているときに、レギュラーのブルーグラスのバンドらしきメンバーの

一人が声を掛けてきた。「おまえら慶應なんだって？」

これが生江さんとの初対面だった。

(生江さんと言っても何のことか分からぬだろう。

僕がこんな人間になるきっかけを作った人、とでも言っておこう。以下次号に登場予定)



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy